

創立60周年  
since 1962

# 東京バッハ合唱団 月報

[第720号] 2022年6月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101

Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3-47604

Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.720

June 2022

5-17-21-101 Funabashi,  
Setagaya-ku, Tokyo

創立60周年記念企画“この60年を振りかえる”第6回<最終回:2013-2022>

## 大震災(2011.3.11)とパンデミック(2020~)…バッハ運動の拡大

大村 恵美子 (主宰者)

大急ぎでたどった「60年」の最終回です。連載第2回で「1962年7月1日、バッハ運動のはじめ」と題しましたので、この「バッハ運動」にもういちど触れて、閉じようと思います。

ご存じのように、1750年の死後、J・S・バッハは新しい時代の音楽界からは忘れ去られていましたが、19世紀生まれのメンデルスゾーンを中心とした若い音楽家らの努力により、1829年にベルリンの市民合唱団によって、先ず《マタイ受難曲》が「復活上演」されたのです。これを契機に、1850年の歿後100年「バッハ協会」が設立され、「バッハ全集」の刊行(ブライトコプフ社)……と進んで、やがて今日のバッハ音楽の隆盛に至りました。19世紀のベルリンを中心とした市民たちのバッハ合唱団との出会いが、バッハ隆盛の背景の一つにあったとされ、(大雑把ですが)これを称して「バッハ運動」と呼んだりします。日本でバッハを日本語上演するわれわれの活動を、ドイツ文学者の故・杉山好氏は「市民運動」とおっしゃいましたが、わたしは、西洋文化の需要の仕方への批評、文化の在り方への提言をふくんだ「バッハ運動」と見なしています。

先日、合唱団は久々の定期演奏会を開催しました(第121回、右掲の写真)。来場者にお配りしたアンケートへの回答を拝見し、バッハのカンタータの存在が日常の風景になったこと、その日本語訳詞による上演に、もはや違和感を抱く方が少数になったこと、などをつくづく感じたものです。60年前は「カンタータって何?」の時代だったのだし、訳詞上演は偽モノ扱いの時代だったのです。

連載の前回では、バッハの日本語演奏が充実してきたことに触れました。が、それもわれわれの内での充実にとどまり、日本という規模では、まだまだ広がりが見られません。次の課題は「広がり」です。そのヒントの一つが、2015年の「3.11被災地訪問・南相馬公演」(第112回定期、南相馬市民文化会館)だったろうと思われま。

それまでにも、仙台(1966)、甲府(1968・1981・82)、横浜(1974)、長崎(1980)、大和市南林間(1981・84・85)、春日部(1985)、足利(1987・95)、松山(2007)と、各所をお訪ねしましたが、被災地との連帯という



■創立60周年記念公演(第121回定期演奏会)5月14日・杉並公会堂。大団円は、お馴染みのカンタータ147番のコラールを聴衆とともに歌った。次ページに関連寄稿、次号7月号で詳報。[写真提供:南パラビジョン]

使命をもって、また現地の合唱仲間との協演という成果も得て実現できたことは格別でした。

二つ目は、長野県小布施(栗の名産地)の町立美術館がわれわれを、小布施音楽祭の一環として、長期にわたり招聘したいと示してくれたこと。毎年夏の野尻湖合宿は、湖畔の木造教会でのコンサートで締めることが恒例でしたが、ここへのご来聴の常連、桜井悦子さんが、ご自身ゆかりの小布施町とのつながりを作ってください実現したものです。2018年に始まり、翌19年に形が整い、この先10年間は招きますというご意向をいただいて、2020年夏の信州巡演(軽井沢追分・野尻湖・小布施)を企画した矢先に、コロナ禍によって延期・中止へと追い込まれました。地域の方々との長期の触れ合いから、何か新しい展開が生まれるはず、という期待は、かくして目下“順延”となっています。

### 2015年

・8月22日(土)、「3.11被災地訪問演奏・南相馬公演」(第112回定期演奏会、BWV81, 92, 227) S 光野孝子、A 佐々

### 月報2022年6月号 CONTENTS

- ・記念公演のステージを共演(椿 高明) …p. 3
- ・ライブツィヒ聖トーマス教会は?(小海 基) …p. 3
- ・連載: 退屈するのはいそがしい [16] (大野博人) …p. 4

木まり子、T 鏡貴之、B 山本悠尋、Orch 東京カンタータ室内管弦楽団、Org 石川優歌、指揮大村恵美子。

#### 2016年

- ・4月、第22回エキュメニカル功労賞受賞。
- ・8月5日(金)、信濃町市民とのワークショップ「日本語でバッハ」(野尻湖公民館、指導B山本(～18年まで3回))。

#### 2018年

- ・8月2日(木)、小布施公演①(小布施音楽祭招待、おぶせミュージアム、BWV1 抜粋、4全曲) S 光野、Vn 中川典子、他。

#### 2019年

- ・5月18日(土)、第118回定期演奏会(BWV79, 109, 166, 188、府中の森芸術劇場)、S 光野、A 谷地畝晶子、T 鏡、B 小藤洋平、Orch 東京カンタータ室内管弦楽団、Org 新妻由加。
- ・8月1日(木)、小布施公演②(おぶせミュージアム、BWV1 抜粋、4全曲) S 光野、管弦楽にARS有志初参加。

#### 2020年

- ・翌21年(2021)にかけ、新型コロナ・パンデミックのため、7回の特別公演(信州巡演など)と2回の定期演奏会(第119、120回)が中止となる。
- ・12月5日(土)、“無聴衆上演”(Youtube公開、119定演代替、BWV110, 248前半、荻窪教会)、ARS有志、Org 中澤未帆。

#### 2021年

- ・10月2日(土)、“12名の聴衆のための”(Youtube公開、120定演代替、BWV 78, 93, 113, 184, 221、荻窪教会)、ARS有志、Org 田尻明葉。

#### 2022年

- ・5月14日(土)、第121回定期演奏会・創立60周年記念公演(BWV 1, 21, 147、杉並公会堂) S 光野、A 谷地畝、T 鏡、B 山本、管弦楽ARS、Org 室田千晶、指揮大村恵美子。

## <特別寄稿>

# 60周年記念のステージを共演

椿 高明 (ARS 運営、団友・後援会員)

創立60周年記念演奏会のご盛会を、心よりお慶び申し上げます。そしてこの還暦という大切なステージを、演奏で一緒させていただきましたこと、たいへん光栄に感じております。本稿では、これまでの歩みを私たちの視点から振り返りたいと思います。

\*\*\*

さかのぼること3年前、2019年の夏からご縁をいただきまして、これまで都合13曲のカンタータと、クリスマスオラトリオを3度、一緒させていただきました。そのつど、あたらしく出会う作品に心ときめかせ、バッハ作品の美しさと奥深さに感嘆するとともに、選り抜かれた日本語の訳詞と、熟考されたフレーズ割りつけに興味をそそられ、教会堂にどんな響きが満たされるのだろうか、と期待をふくらませてきました。

ARS(コレギウム・アルモニア・スペリオール・ジャパン)は研鑽団体ということから、講習会のほか、リサイタル形式/コンサート形式など様々な活動を企画しますが、そのたびに参加者を募集する方式で運営しています。そのなかであって、東京バッハ合唱団様の賛助演奏は、魅力的な曲目もあいまって楽しみにしてくれるメンバーが増えつつあり、このところ毎回夢のようなスタッフィングが実現することから、運営者としていつも至福の喜びを味わっています。殆どのメンバーは3年前は、まだバロック作品の演奏は初心者に近かったわけですが、道中に第一線の古楽演奏家の講習会のレッスンを挟みながら、十指を超えるカンタータを演奏するなかで、だんだんと力がついてきたことを実感し、ARSでは人気の企画に成長してきております。

とりわけ大村先生、ソリスト・オルガニストの先生方、合唱団の皆様とつくりあげる、真剣勝負の合奏練習では、毎回、ひとの肉声の迫力、言葉のある音楽の力に鳥肌するとともに、何十年も脇目を振ることなく、ひとつの作業に取り組み続けてきた集団の円熟したオーラに感嘆を禁じえません。そのたびに、この上なく充実した、二度とない機会をいただいていると、感動しております。

合唱団60年のあゆみを仰ぎ見れば、わずか直近3年にすぎない新参者ですが、毎回、大村恵美子先生、加藤さんはじめ、合唱団のみなさまの暖かいウエルカムにつつまれ、また初年にお誘いいただいた野尻湖の合宿では合唱団のおひとりおひとりと親しく交わらせていただいたり、チェロ勉強中の息子[椿周氏、現在桐朋学園高校2年在学中:編集部]に特別な機会をいただいたり、お仲間に入れていただいたこのうえない幸せの日々を楽しませていただいております。これからもどうぞ、末永いご交詢を賜れましたら、何よりの幸せと思っております。(ARS:オーボエ奏者)

### ◆後援会・団友・OB/OGの皆様、月報ご愛読の皆様◆

## 創立60周年記念祝会

—コロナ禍なので、飲み食い無しで、地味目に—

.....

当合唱団は、60年前の7月1日に誕生しました。

人で言えば還暦。本来ならば盛大に祝うはずでしたが、ふだんの練習場(荻窪教会)を解放していただき、心のこもった音楽の饗宴でお迎えすることと致しました。ご一緒に、われわれの60年を祝っていただければ幸いです。

.....

●とき:7月2日(土)午後2時~4時

●ところ:日本キリスト教団・荻窪教会

(JR/東京メトロ丸の内線「荻窪駅」下車、南口徒歩8分)

●参加無料(予定人数の把握のため、ご予約をいただければ有りがたいです)

#### <新曲ご披露>

①大村恵美子(主宰者)作詞/作曲《今この地球に》

②松尾茂春(団員)作詞/作曲《キラキラ星変奏曲 Version2.0 —主題と1+40の変奏で歌い綴るイエス・キリストの足跡— から

- ・合唱:東京バッハ合唱団
- ・器楽:ARS有志
- ・オルガン:田尻明葉(荻窪教会の新オルガン披露)

#### <歌いましょう>

③カンタータ147番の例のコラール《イエス わが喜び》(“主よ人の望みの喜びよ”原曲)。コピー楽譜進呈。

<残りの時間は、しずかな語りいで>

◆月報バックナンバーは、当団HPからご覧いただけます。  
[http://bachchor-tokyo.jp/monthly\\_newsletter/index.htm](http://bachchor-tokyo.jp/monthly_newsletter/index.htm)

# 本場ライブツィヒの聖トーマス教会— 「コロナ禍」でどうなっていた?

小海 基 (団員)

前号の月報 (719 号) で、写真と共に「やわらかなバッハの会」代表の橋本絹代さんが、2 年ぶりに聖金曜日に昔と同じ形でトマナコア (聖トーマス教会聖歌隊) がバッハの《マタイ受難曲》を演奏したニュースを伝えて下さって、本当に安心しました。東京バッハ合唱団ばかりでなく世界中の合唱団、オーケストラが「コロナ禍」で大変な思いを強いられてきたわけですが、団員に変声期の少年をたくさん抱えるトーマス学校のような組織は、さぞかし大変であったろうと心配していました。まして聖トーマス教会では、この2 年間で人事の点でも激変の年でもあった事を伝え聞いていたものですから……。

2021 年に新トーマスカントールがアンドレアス・ライツェ (1975 年生まれですから今年 47 歳!)、22 年にオルガニストもヨハンネス・ラング (1989 年生まれの 33 歳!) と、一気に若返ったのです。しかも若返ったとたんの「コロナ禍」襲来だったわけです。

オルガニストの方は、聖トーマス教会創立 800 周年の一連の記念式の責任を果たしただけでなく、バッハ没後 250 年を記念する 2000 年に、4 段鍵盤 62 ストップのゲラルト・ヴェール制作の「バッハ・オルガン」

(外観が 1717 年の大学教会オルガンのコピー) 新設に精神的に力を注いだウルリヒ・ベーメ (今年で 66 歳) が円満隠退し、若いラングに代わったわけですから良いとしても、話題を呼んでいるのは、今回で第 18 代目となるカントール職の方です。かつて J・S・バッハも担ったこの職を得たのが、スイス人のカトリック教徒であるライツェであったことで、ニュースが飛び交っているのです。「あの保守的なザクセンにしてはよくまあ大胆な人事! 合わない。プロテスタント陣営に人材が枯渇してしまったのか?」と、大騒ぎです。60 周年を迎えた私たちの東京バッハ合唱団には、当たり前のようにプロテスタントばかりでなくカトリックも、仏教徒も無宗教のメンバーもいますし、「エキュメニカル功労賞」まで受賞していますが、さすがに「本場」では教派問題が大変な議論となるようです。

私もドイツ在住の友人に情報を送ってもらいました。バッハの時代もそうですが、現在でも聖トーマス教会の「カントール」職の人事権を握っているのは教会側というよりもライブツィヒ市議会にあるようです。最終候補として残った 4 人の中から満場一致の選出であったようです。800 年以上の歴史を誇る聖トーマス教会のことですから、もちろんカトリックの時代もあった



■新カントールのライツェ氏 (<http://www.kirishin.com/2022/01/13/52186/>)

わけですが、宗教改革以降でトーマスカントール職にカトリック信者が着任するのはこれが初めてです。地元 TV 局がトマナコア OB にインタビューした番組によると、合唱団側 (特にトーマス学校 10~11 年生という「上級グループ」) は、トマナコア OB でもあり現在ライブツィヒ大学の音楽監督でもあるダービッド・ティムの就任を望んでいたそうで、トマナコアの現団員の、特に 16~18 歳の上級グループの中から激しい反発 (「革命」とさえ呼ばれました!) が起こり、「92 年に前カントールのゲオルク・クリストフ・ビラーが選考された時と同じで、今回も自分たち団員の声を選考に反映されなかった」と、公開質問状まで出る騒ぎとなったようです。「もっとバッハのカンタータを演奏、録音していく!」と豪語していたビラーでしたが、結局体調を崩していつの間にか姿を消してしまい、仕方なく 15 年 2 月 1 日までゴットフォルト・シュヴァルツが「暫定カントール」を担い、更に 21 年 6 月 30 日まで正規の「カントール」を担ったものの、それ以上の「任期継続」はしない、その交渉さえしない結果となってしまう (シュヴァルツ自身は継続を希望していたようですが……)。既に「新型コロナ禍」が始まっているのに、しかも 23 年には「バッハの聖トーマス教会カントール就任 300 年」を迎えるというのに、何故シュヴァルツに「任期継続」交渉さえしないのかと、怒号のような声さえライブツィヒ市当局には寄せられたようです。

選考委員会の委員長は、ラジオの音楽番組でのインタビューに「特にライツェの、年少団員への指導の素晴らしさが選出の決め手となった」と答えています。声にこそしないまでも本音は、トーマスカントールの選考委員は外部の人たちだけで構成されており、特に反対の声を強く上げているトーマス学校最終学年の第 12 学年生たちについては、「全員夏までに合唱団を卒業するもの声だ」とあしらったようです。

カトリックのケルン大聖堂ラジオ局のインタビューでライツェはこう語っている。「私はカトリックの両親の元で育ちました。母は大聖堂と学校の〈宗教〉の教師でした。私は素晴らしいカトリック典礼の伝統に育てられてきました。しかしいつも私の家族の昼食の食卓には改革派の女性牧師も同席し、毎日のように語り合っていました。私はカトリックとプロテスタント両派の間で育ち、チューリヒとベルンの大学ではプロテスタントの教会音楽を学びました。更に大学院に進み、両者を心から理解しているつもりです」……「教派の問題よりも、107 名という私に託された史上最も人数の多い聖トーマス教会聖歌隊員たちの中で、昨年のトーマス学校 5 年生 (10 歳) のように、新型コロナ禍のために、ほとんど全く合唱を経験することが許されないうで 1 年間を過ぎさなければならなかった 30 名近くを、どう指導していくかが問題です」……「私たちはチームなのです。男子少年合唱団は、年少の団員から上級生の団員まで、ひとりひとりが素晴らしく個性的です。男の子たちが一つの共同体の中で互いを尊重しながら成長することが大切です。音楽という木の下で育てていこうではありませんか!」。

(日本キリスト教団・荻窪教会牧師)

◆上演歌詞対訳は、当団 HP からご覧いただけます。  
[http://bachchor-tokyo.jp/japanese\\_words/index.htm](http://bachchor-tokyo.jp/japanese_words/index.htm)

## 虫の狂想曲

安曇野閑人 大野 博人

「何これっ？」

車の助手席にいた妻が素っ頓狂な声をあげた。「サイドミラーになにかぶらさがってる。動いてる」。確かになにかがごそごそ。窓ガラス越しに顔を近づけた彼女が二度びっくり。「蜂だよ、巣を作ってる」

アシナガバチが一匹、サイドミラーの下部で巣づくりにいそしんでいる。小さな六角形がすでにいくつかできている。しっかりくっついていて車が揺れても落ちない。蜂も黙々と作業を続けている。

その前2週間ほど、安曇野を離れていた。屋外に駐車していたので目をつけられたようだ。

大きくなり続ける巣をぶら下げたまま車を走らせるわけにはいかない。悪いけれど、おそろおそろ長い棒で突っついて落とした。やれやれ……。

拙宅を建てたばかりのころ、ひさしに蜂の巣ができた。ネットには除去業者の広告がたくさんあった。だいたい一件1万円。高いなあ。市役所に相談したら除去を頼める人の電話番号をくれた。酒屋さんだという。

「なんで酒屋さん？」

「さあ、どうしてでしょう」

要領をえない会話をしたあと、電話してみたら、ほんとうに酒屋さんが出てきた。すぐに来てくれるという。料金は2000円。安い。頼むと、酒屋の軽バンがやってきた。車から小柄な初老の男性が出てきた。店主だ。スズメバチなどを焼酎に漬けた商品をつくるため採集し始めたのがきっかけ。続けるうちに蜂の生態にも詳しくなり、巣の除去まで引き受けるようになったという。なるほどね。

蜂マニアだった。車からガラス瓶を持ち出してきた。巨大なスズメバチがアルコール漬けになっていた。びっくりする私に得意満面。安曇野のスズメバチやクマバチ、蜂の子などについてのうんちくを30分あまり披露したあと、ようやく巣の除去に。

「小さい。アシナガバチだから焼酎にもできない」というとシューッと殺虫剤を噴霧。蜂がパラパラと墜落すると、巣をたたき落として、おしまい。ほんの2、3分の作業だった。帰りぎわに、「マムシも見かけたら呼んで」と言う。「マムシ酒にするので」。

安曇野はこれから本格的に虫の季節である。蝶々は優雅だけれど、家の中ではクモやアリ、ゲジゲジ、カマドウマ（通称、便所コオロギ）、カメムシなどもうごめき始める。庭には毛虫や小バエ……。畑でもテントウムシダマシなどの害虫への警戒が必要だ。虫との闘いは晩秋まで続く。

だが、安曇野の虫はまだかわいい。虫の脅威を感じたのはカンボジアで、だった。内戦が終結しつつある



■サイドミラーで巣づくりにいそしむ蜂（写真も筆者）

ころ、自衛隊が派遣された田舎町に、私の新聞も取材拠点として二階建ての空き家を借りた。屋根と柱と壁があって家の形はしていたが、窓にガラスはなし。建設途中だか解体途中だかわからない、街はずれの軒家だった。電気も来ていないので発電機を持ち込み、電球や衛星電話、ワープロをつなぎ、記者たちは何日も泊まり込んで仕事をした。

熱帯の夜。あたりで明かりが灯っているのは私たちの居場所だけ。日没と同時に付近の草むらや雑木林からありとあらゆる虫が家の中に殺到する。各種甲虫から蛾、ゴキブリ、ムカデ、小さなサソリみたいな奴までいた。白っぽい壁は無数の虫で黒ずむ。スプレーで殺虫剤を撒くと、当たったところだけ虫が落ちて白い壁がのぞくけれど、すぐまた新たな虫たちがそこを埋める。汗だくでワープロをたたいていると、水分を求めてTシャツや短パンの中に入ってきては体はいずり回る。ベッドに蚊帳をつつても隙間から侵入する。朝起きると、体中に虫刺されのあとがあった。

夕食は、日本の肉まんみたいな「蒸しパン」が定番だった。暗がりによく見ないまま口に入れていたが、ある日、昼に食べようとした。肉まんと同じように底に紙がついている。それをはがすと、ゲジゲジが蒸されてパンに張り付いていた。

文字どおり「むしパン」だった。

バッハの《農民カンタータ》の中に、蜂や蚤のうっとうしさに触れたアリアがある。だが音楽はとてもさわやかで楽しい。バッハはカンボジアに行ったことがないにちがいない。

（団友・後援会員、元朝日新聞記者）

### [編集後記]

- ・5月14日、創立60周年記念公演をつつがなく終了いたしました。アンケート回答の温かいメッセージに、団員一同、大喜びです。来月号で特集します。
- ・今月号の号数はめでたく12月×60年=720号になりました。創立の初期は、わら半紙に端正な文字（T夫人の手になる）のガリ版刷り、まさに「月報」でした。今後も変わらず、合唱団と読者のみなさまを繋いでいきます。
- ・ご寄稿がたっぷり、「バッハ・カンタータの情景」連載は、またしても繰り延べにさせていただきます。感謝（K）。